ワークショップ２

今さら聞けない奨学金、今こそ話したい学生支援

報告者

水戸 康徳 氏　　札幌大学 学務部学生課 職員

中山 博文 氏　　立命館大学 学生部 学生オフィス（衣笠） 課長補佐

山本 愛理 氏　　京都文教大学卒業生

コーディネーター

中西 勝彦 氏　　京都文教大学 総合社会学部 助教

〈ワークショップ 2〉

今さら聞けない奨学金、今こそ話したい学生支援

コーディネーター
京都文教大学 総合社会学部 助教　中西　勝彦

○本ワークショップのねらい

本ワークショップでは、奨学金制度の現状を踏まえ、学生にどのような支援ができるのかを講演とグループセッションを通じて議論した。

奨学金受給率が３～５割とされる現在、「高等教育の修学支援新制度」が開始され給付型や授業料減免などの新たな支援制度も加わり、奨学金制度はますます複雑化している。一方で、奨学金は担当部署の職員や外部業者に丸投げしている大学も多く、学生の受給状況や奨学金に関する学生支援上の課題などは可視化されにくい。

そこで、本分科会では学生と奨学金との関係を①申請時、②受給中、③返済時、の３つに区分し、各区分に詳しい方々に情報提供いただいた。その後、各区分で生じる学生支援上の課題について、参加者（教員、職員、学生）同士で知恵を出し合い、これからの学生支援の方法を検討した。

○報告の概要

まず、コーディネーターである中西より、本ワークショップのねらいと言葉の定義を説明した。その後、参加者全員で車座になり、アイスブレイクとして参加者全員が自己紹介（所属、名前、呼ばれたい名前、本 WS の参加動機）を行った。そして各登壇者の発表に移った。

講演１では、水戸氏より「『なんか…学費？の申込どれですか？』から始まる奨学金申請の今」というタイトルでご発表いただいた。水戸氏は、10 年以上の奨学金実務経験を踏まえ、YouTube を通じた情報発信にも力を入れておられる。ご発表では、①奨学金申請時における学生の躓き要因、②日本学生支援機構（以下、JASSO）の奨学金（３タイプ）の概要、③実際の申請の流れ、について簡潔明瞭にご説明いただいた。

奨学金は専門用語が多く毎年のように複雑化し続けている制度であるため、学生にとっては理解が難しく「奨学金アレルギー」に陥ってしまう可能性があること。しかし、学生自身が動かないと採用に至らず退学や除籍のリスクを抱えてしまうため、学生が自ら動く必要があること。そのためには学生のニーズを具体化し、制度について学ぶ手段を明示することと、周囲の学生も奨学金を利用していることとを伝え、学生が自ら動き出すきかっけを提供することが重要であると強調された。最後に、グループセッションに向けた問いとして、「私たち大学教職員はどこまで“支援”すべきか？」を提示いただいた。

なお、水戸氏のご発表はご自身が運営される YouTube チャンネル「サツダイ奨学金担当」で公開されている。ご覧になりたい方は、以下の URL からアクセスいただきたい（こちらの YouTube チャンネルは収益化しておられない）。

https://youtu.be/-lC9gKc1khI

講演２では、中山氏より「今こそ聞きたい適格認定」というタイトルでご発表いただいた。本発表では主に「高等教育の修学支援新制度」における「適格認定」についてご説明があった。同制度における適格認定は、JASSO が行う「適格認定（家計）」と各大学が行う「適格認定（学業）」の２つをもとに、奨学金継続の可否を判断することを指す。大学の担当者としては、特に「適格認定（学業）」において学生が「継続」と判定されるよう（「警告」「停止」「廃止」とならないよう）支援を行う必要があることが確認された。通常、「適格認定（学業）」は、秋学期終了時点での「卒業予定年月」「修得単位数」「GPA 等」「学修意欲」をもとに判定される。中山氏の立命館大学では、春学期終了時点の成績で適格認定を行いその状況を本人と生計維持者に通知し、状況の改善が必要な学生には、学内の個別サポート部署を案内するなどの支援を行っているとのことであった。また、2025 年度からは「修得単位数」や「出席率」の基準が引き上げられ、適格認定の適正化が図られるとの説明もあった。

最後に、グループセッションに向けた問いとして、「①奨学金受給を継続するために、学業成績の低下を防ぐ必要があるが、そのために何ができる？；②学業を継続するためには生計の維持が必要だが、それは

大学がすべきこと？するとして何ができる？「学びたい気持ち」をどう応援する？」が提起された。

講演３では、山本氏より「当事者からみた奨学金」というタイトルでご発表いただいた。山本氏は学生時代、JASSO の貸与奨学金（第二種）を借りておられたため、申請時、受給時、返還時の各段階において、当事者としてどのような意識だったのかについてお話いただいた。具体的には、申請時は「自分で借りる」という自覚が薄かったこと、保証人を叔父に依頼した際に「引き受けるけど、自分で返すんだよ」と言われたことにピンとこなかったこと、奨学金と自身のアルバイト代で学費を支払っていた自覚はあったため学生 FD 活動などに積極的に取り組んだこと、返還時の説明会で返還システムについておおまかに理解はしたものの「自分事」として考えていたわけではなかったこと、入院手術等で返還が滞りそうになった時期には手続きが面倒だったため親に代わりに支払ってもらっていた時があったこと、卒業後に行った手続きは結婚による苗字変更のみだったこと、などが語られた。

また、山本氏は大学職員に転職され、そこで奨学金担当をされていた経験もお持ちで、担当になってようやく理解できたこともあったこと、そして奨学金担当者として学生に「親じゃなくて自分のことだよ」と説明することを心がけたこともお話いただいた。

○報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

●質疑応答

各発表が終わる度に質疑応答の時間を設けた。そこでやり取りされた内容は以下の通り。

【水戸氏に対する質問】

〈質問１〉奨学金申請のパターンが 13 ほどあるとのことだったが、学生自身がどのパターンに当てはまるかを自己診断できるサイトやシステムはないのか？

〈回　答〉あればいいが、現状、公式から出てはいない。一応、JASSO の冊子に一覧や説明が載っているが、文字量が多いため読む人は少ないと思われる。大学独自のシステムを作っているところがあると聞いたことはある。

〈質問２〉申請書類にミスがあると、本人も大学も困ることになるが、そのようなミスを AI などでチェックするシステムはないのか？

〈回　答〉これもあればいいが、実際にはない。逆に言うと、そういうシステムを構築すれば売れるのではないか。

〈質問３〉なぜ、そのようなシステムやチェック機能がないのか？

〈回　答〉国の方針で制度を増改築しすぎて、JASSO 自身も管理維持だけで手一杯で、システムを構築できないのかもしれない。また予算面でも難しさがあるかもしれない。

〈質問４〉学生や大学が何をするか、という話はあったが、文部科学省や JASSO は何をしているのか。どこまで手伝ってくれるのか？

〈回　答〉文科省はルールを定めて終了。JASSO は何とか良くしていきたいと考えておられるようだ。例えば、最近の JASSO はミスの起こりやすい手続きについて、手軽に見られる実用的な説明動画を出している。現場の感覚では、JASSO も少しずつ歩み寄ってきてくれているなと感じる。

【中山氏に対する質問】

〈質問１〉適格認定の項目に「GPA 等」とあったが、「等」とは何のことを指すのか？

〈回　答〉大学によっては GPA を取り入れていないところもあるため、それを踏まえた表現になっていると思われる。

〈質問２〉来年度から適格認定の基準が変わるとあったが、これは周知されているのか？

〈回　答〉これは 2025 年度の適格認定からの適用であり、実際に作業を行うのは 2025 年 4 月以降となる。現在は 2024 年度の適格認定（学業）を行う時期であるため、今のタイミングで次年度の方針を取り上げると混乱を招く可能性もあるため、まだ周知されていないのではないか。また、４月から多子世帯の無償化が始まるため、今はそこに広報の焦点が合っており、基準改定の周知まで至っていないのが現状だろう。ただし、前もって周知しないと、警告や廃止を減らす対策につながら

ないため、早めに伝えることが大切なのは間違いない。問題はどうやって伝えるかだが、JASSOは情報を公表してはいるものの、制度が複雑でわかりにくいため、実際は大学から学生や生計維持者に周知することになるだろう。そのタイミングや方法は大学によって異なると思われる。親に任せきりの学生もいるので、どうやって通知するのかも大切な要素になるだろう。

〈質問３〉教員との連携は大切だと感じた。特に、学生の対応を教員に任せている大学では、今回の基準改定について教員も知っておく必要があると感じるがどうか？

〈回　答〉その通りであると考える。

〈質問４〉「廃止」の基準として、出席率が５割以下、改定後に６割以下となっているが、そもそも授業に2/3以上出席しないと単位が認定されないのではないか？この見直しの意図は何か？

〈回　答〉大学または科目によっては2/3以上出席ルールを採用していないところもあるため、それを踏まえてのことではないか。一方で、この基準の見直しがどれくらいのインパクトを与えるのかは、運用が始まってみないとわからない部分がある。

〈質問５〉出席率の基準自体、各大学によって異なると思われるが、そのあたりは各大学の判断に委ねられているのか？

〈回　答〉その通りである。個別に見れば様々なケースがある。例えば、途中で退学や除籍になった学生にも適格認定をしないといけないが、その場合、学修意欲や出席率をどうやって判断するのかは各大学に委ねられている。しかし、実際の判断はかなり難しい。

〈質問６〉適格認定は貸与型でも行っているのか？

〈回答〉行っているが、基準はかなり異なる。給付型ほど厳しくはない。

【山本氏に対する質問】

〈質問１〉奨学金は自分で調べないといけない部分が多いと思う。山本さんご自身の経験を踏まえ、学生にどういう支援ができるとお考えか？

〈回　答〉高校生の時にライフプランを考えられていたかは重要だと思う。今回の水戸さんのお話は、私が高校生の時に聞きたいなと思った。支援で言うなら、高校生や大学生が自分でライフプランを立てられるような支援が必要と感じる。

〈質問２〉叔父さんからの言葉はかなり重いものと感じた。しかし、それでもお金に関する自覚はなかなか芽生えないのが実際なのだろうと受け取った。ご自身はお金に関する教育を受けてきたか？

〈回　答〉家庭教育の面だと、経済的に厳しい現状を子どもに伝えたくない、という親の気持ちもあって、お金の教育はしづらかったのだろう。学校教育の面だと、ライフプランを考える機会はあったが、それでもなかなか自覚を持つには至らなかった。現在は自身が親の立場になったので、自分の子どもに何歳からお金のことを教えたらいいのかを考えている。

●グループセッション

【進め方と問い】

グループセッションでは、4～5人のグループで30分間ほどディスカッションを行った。進め方は各グループに一任したが、模造紙や付箋紙、ホワイトボードなどを使って、出た意見を書き留めながら進めた。各登壇者より提示いただいた問いから議論を深めた。議論の後に発表を行い、議論で出た意見を全体で共有した。なお、問いは以下の通り。

1. 奨学金申請において、大学教職員はどこまで“支援”すべきか？
   【学生自身の動きを待つ】⇔【全力で積極的な指導をする】
2. 奨学金受給を継続するために、学業成績の低下を防ぐ必要があるが、そのために何ができる？学業を継続するためには生計の維持が必要だが、それは大学がすべきこと？するとして何ができる？「学びたい気持ち」をどう応援する？
3. 特に貸与型について、申請→受給→返還の過程でどのようなことをすれば、学生自身の当事者意識を促すことができる？自分が学生だとしてどのような支援があれば当事者意識を持つことができる？

【発表で出た意見】（当日のグループ名とは異なる）

〈A グループ〉

・ 高校から大学への接続という観点から、高校教員も奨学金制度について理解する必要があるのではないか。
・ 奨学金を借りる人たちのコミュニティがオープンにされていないので、集まって話す場がないのが現状。支援という面で考えると、奨学金を借りていた卒業生と大学1年生とが交流する機会を設けると良いかもしれない。
・ 例えば医療系の学生だと実習中にアルバイトをするのも難しい。時間の使い方が重要になることを考えると、タイムマネジメントの仕方や授業の課題への取り組み方を教える必要があるだろう。
・ 水戸さんが作っておられるカード（「ポケット奨学生証」「ポケット返還票」）はとても良いと感じた。「ポケット奨学生証」は、自身の奨学生番号や保証制度、利率などがメモできる他、入金予定日、説明会の時期、スカラネットパーソナルのURLとQRコード、相談先の情報が書かれた名刺大のカード。「ポケット返還票」は、自身の奨学生番号、返還口座、返還期間をメモできる他、スカラネットパーソナルのURLとQRコード、心構え、奨学金相談センターや救済制度の情報が書かれた名刺大のカード。
・ 水戸さんへの質問。水戸さんのチャンネルには高校生からの質問もあるか？
  回答：寄せられる。ちなみに、YouTubeだと細かく具体的な質問が寄せられるが、ショート動画だとふわっとした質問が多く寄せられる、という違いが見られる。

〈B グループ〉

・ 奨学金を借りている人同士がつながって話せる機会があると良い。一方で、大学としてどうやってつなげるのかを考えた時、奨学金を受給していることを知られたくない学生もいるので、一律に対応するのは難しいだろう。また、プライバシーの問題はハラスメントにつながる可能性もあるため触れづらい面もある。
・ どこまで支援すべきか、に関しては、将来の収入イメージや生活設計が立てやすい職業を目指す学生・大学と、そうでない場合とで異なるだろう。
・ 返還額と収入の関係を考えるなど、マネープランやお金のことを考える力を育む必要もある。例えば、学費は親から子に対する投資の側面があることや、授業1コマあたりの費用を計算できるような情報提供が可能かもしれないし、実際にやっているメンバーもいた。しかし、「自分事化」するための工夫は難しいし、親の意識による差や地域差なども関係しているだろう。

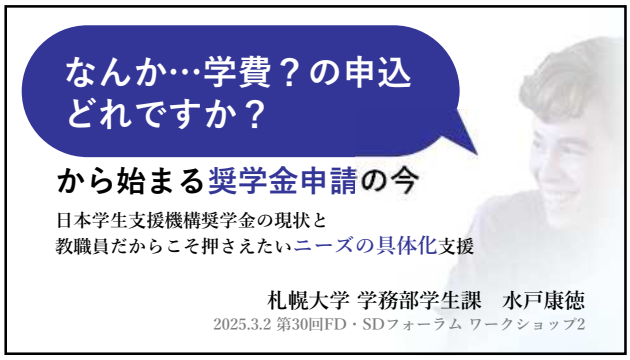
〈C グループ〉

・ 問1の結論としては「大学による」となってしまう。

・ 理想としては「学生自らSOSを発信すること」だろう。SOSが発信されれば教職員も支援しやすくなる。SOSを発信しやすくする環境づくりとして、学生の現在地を説明することとPON（Point Of No-return：ここまで来たらもう戻れないよ、という点）をしっかり伝えることが必要と思われる。
SOSを発信するためには学生が自覚をもつ必要がある。理想としては高校の時に奨学金について勉強し、大学入学時にはすべて知っていて、申請・継続・返還の一貫したイメージが持てている状態でいることだろう。

水戸 康徳　札幌大学 学務部学生課 職員

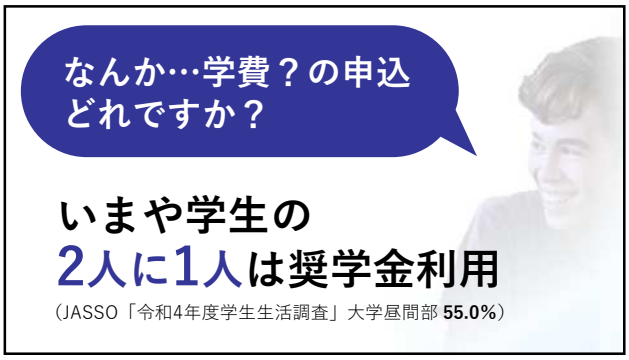
スライド1



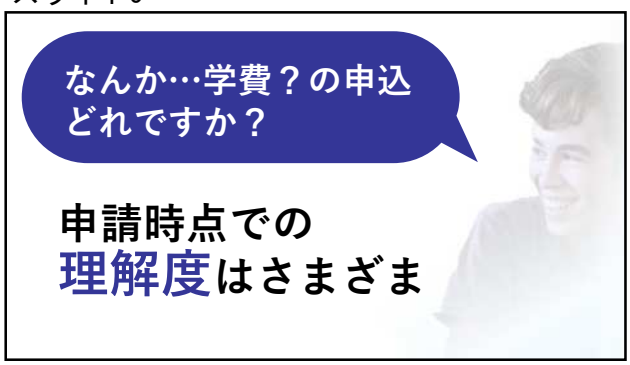
スライド2

スライド3

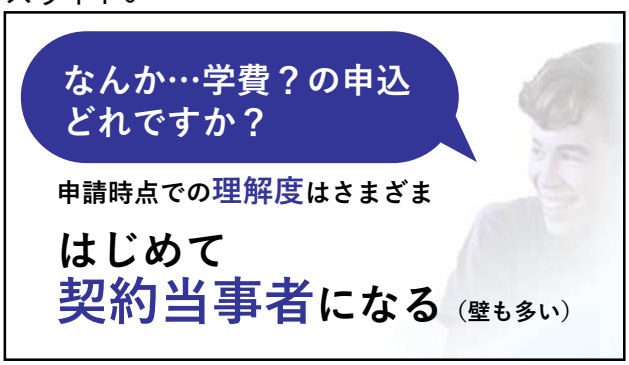
スライド4



スライド5

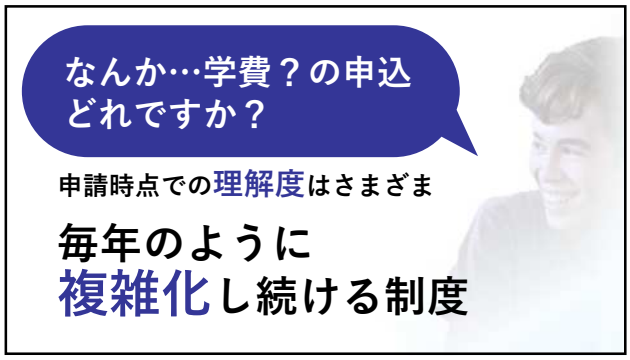


スライド6



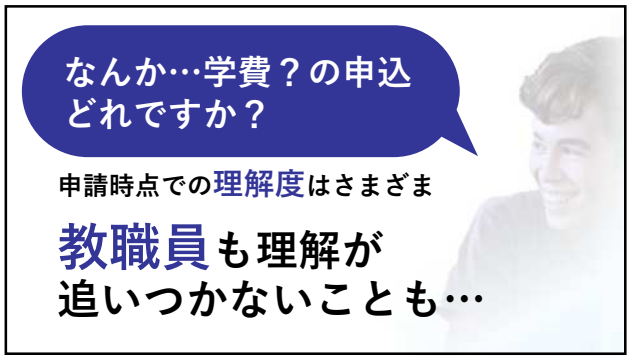
スライド7

スライド8



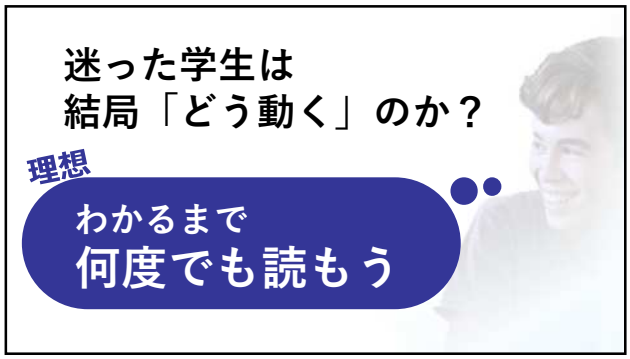
スライド9

スライド10

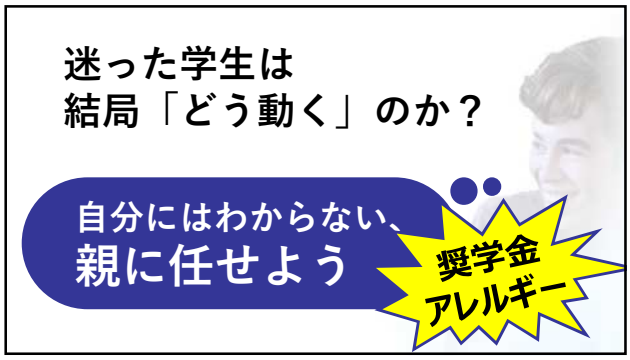


スライド11

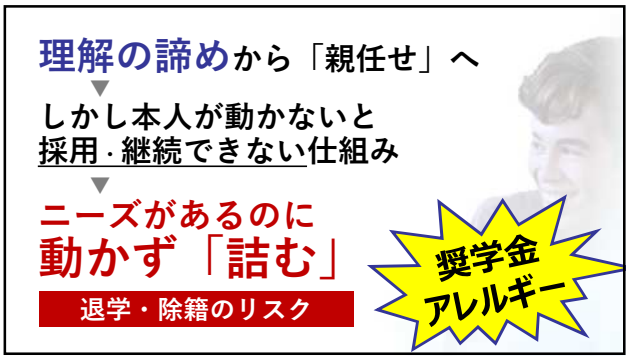
スライド12



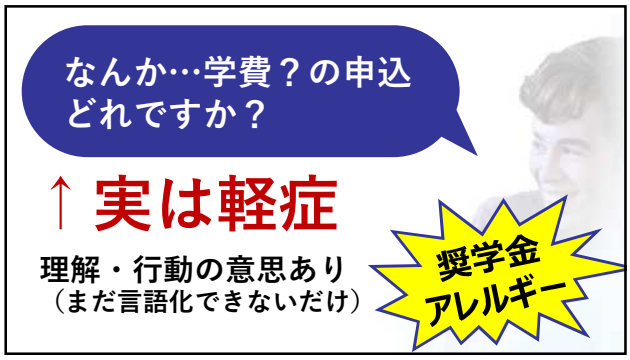
スライド13



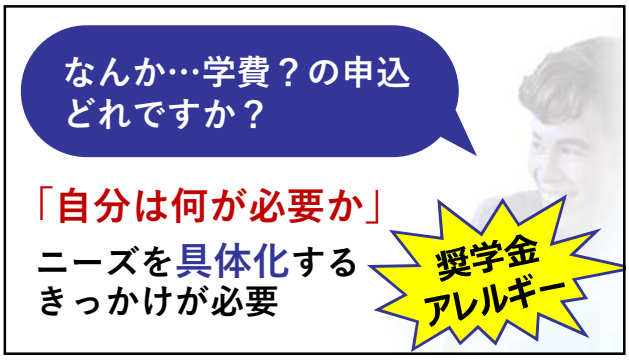
スライド14



スライド15



スライド16



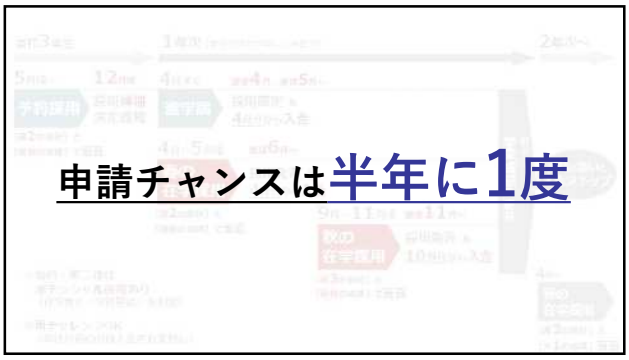
スライド17

スライド18

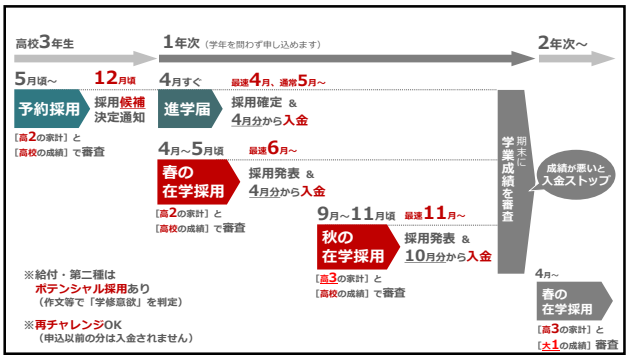
スライド19

制度現状
いつ申し込めるか？

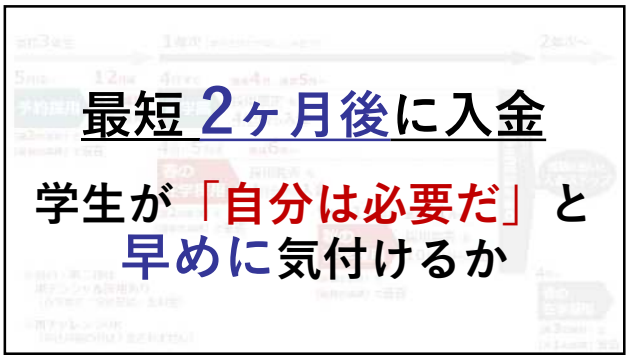
スライド20



スライド21



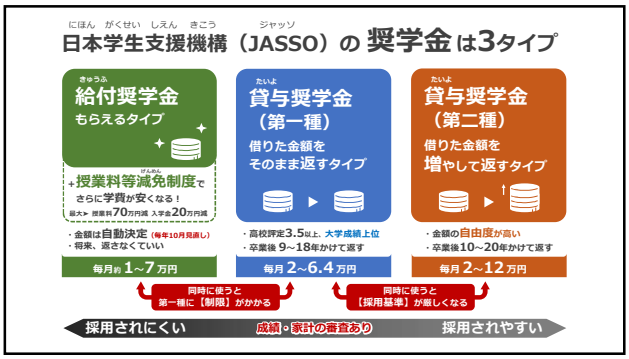
スライド22



スライド23

制度現状
どんな奨学金があるか？

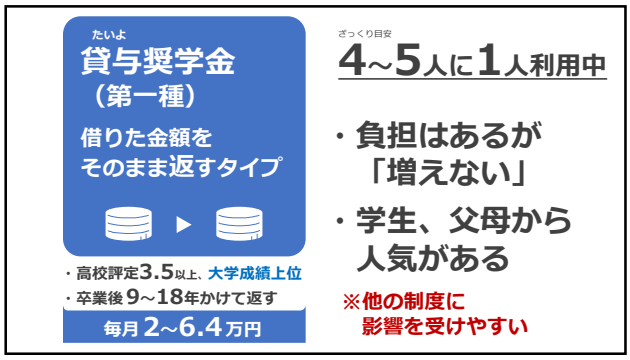
スライド24



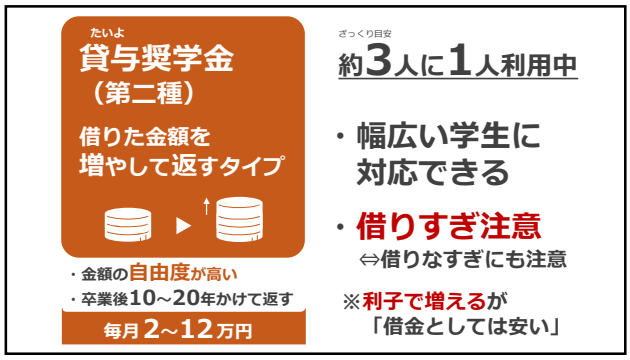
スライド25

スライド26

スライド27



スライド28



スライド29

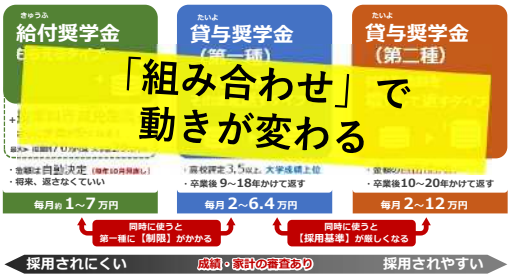
スライド30

スライド31

制度現状

実際の申請の流れ

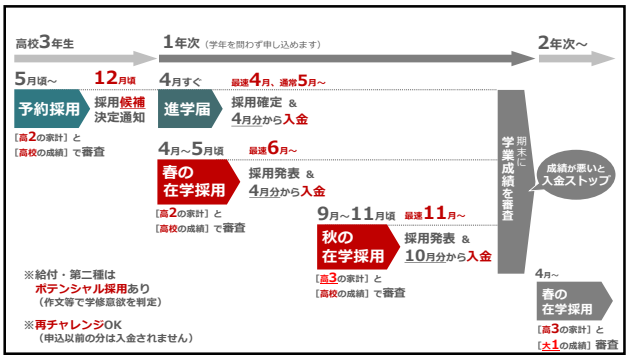
スライド32



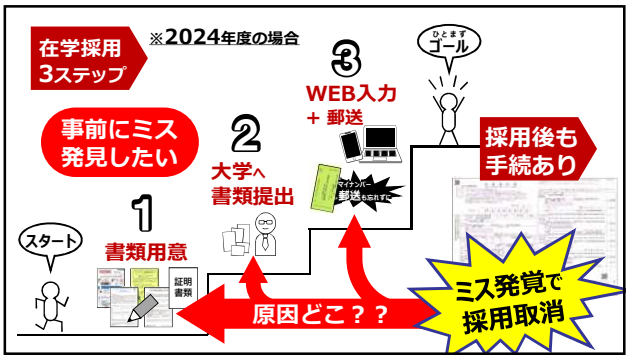
スライド33

スライド34

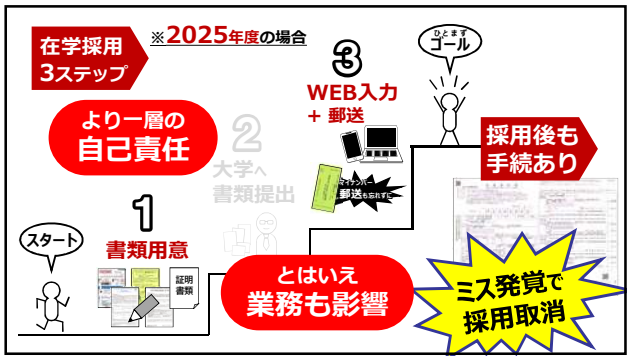
スライド35



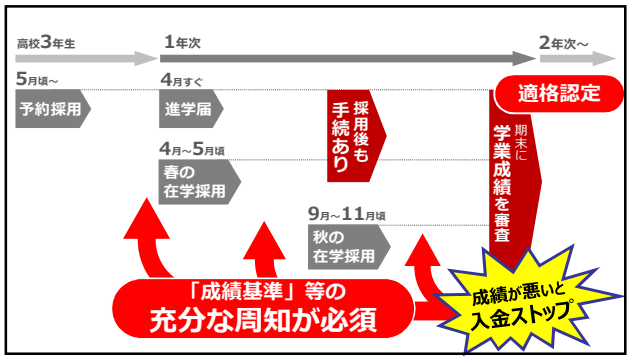
スライド36



スライド37



スライド38



スライド39

課題おさらい

情報が多い！ ムリヤリまとめます

スライド40

課題おさらい

① 「奨学金アレルギー」の罹患

② ニーズの具体化が必要（だが大変）

③ ミスによる自己責任は拡大

④ ただし、教職員にもガッツリ影響

スライド41

「やる気に満ちた学生なら解決！」
かもしれませんが…

「奨学金を学ぶ」ために進学する人はいません

実際「やらなきゃいけない」だけで
進んでサクサク動きたい社会人も・・・（耳が痛い）

スライド42

しかし 絶対に動かないのではなく…

「学ぶ手段」を明示すると
動きが変わります

「周囲も使ってる」が伝わると
学生同士でも影響し合います

教職員だからこそ「伝えられる」

スライド43

問い
グループワークに向けて

スライド44

問い

私たち大学教職員は
どこまで“支援”すべきか？

スライド45

問い 私たち大学教職員は
どこまで“支援”すべきか？

極論1「責任を負う学生自身の動きを待ち、
理解、申請できた分だけ支援すべき」

↕ どこに「ボーダー」を引くか？

極論2「理解自体が困難で、ミスは大学も困る。
全力で積極的な指導をしていくべき」

スライド46

なんか…学費？の申込
どれですか？

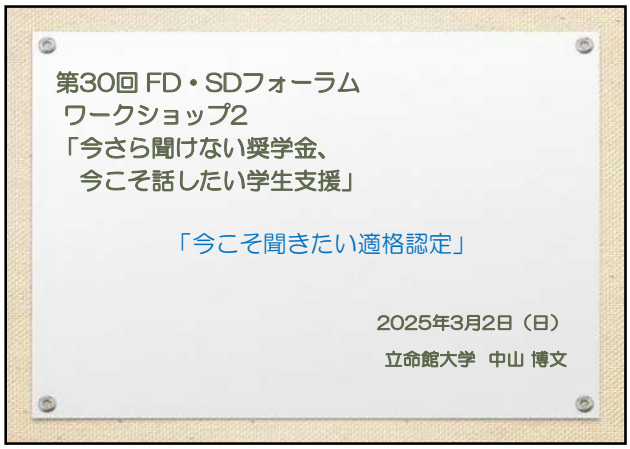
から始まる奨学金申請の今

日本学生支援機構奨学金の現状と
教職員だからこそ押さえたいニーズの具体化支援

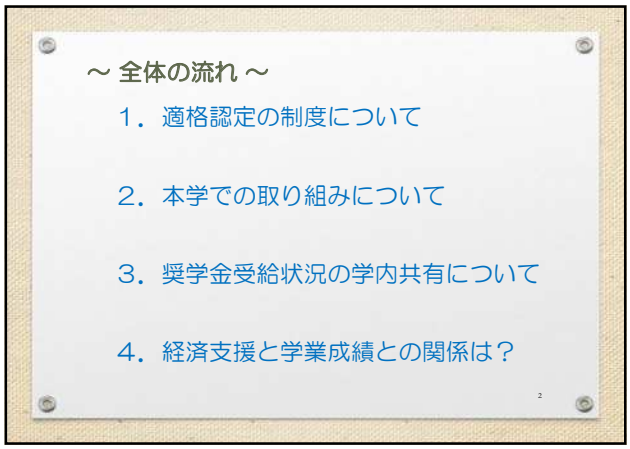
札幌大学 学務部学生課　水戸康徳
2025.3.2 第30回FD・SDフォーラム ワークショップ2

中山 博文　立命館大学 学生部 学生オフィス（衣笠） 課長補佐

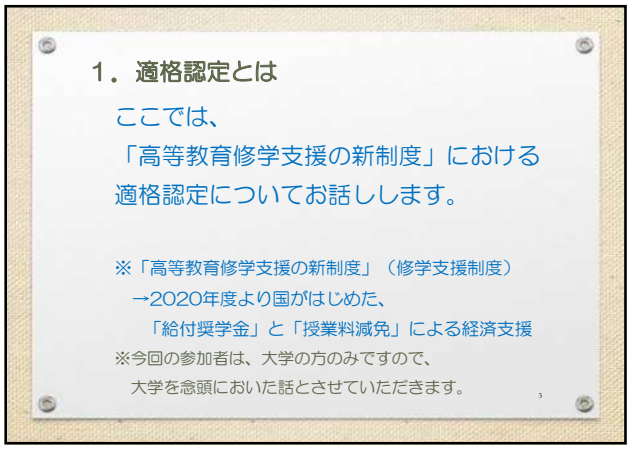
スライド1



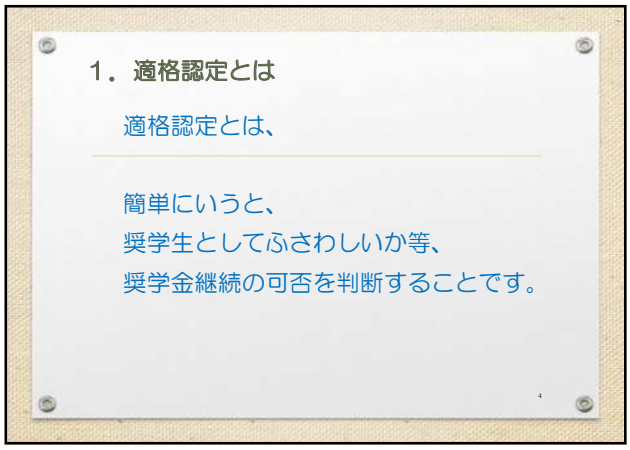
スライド2



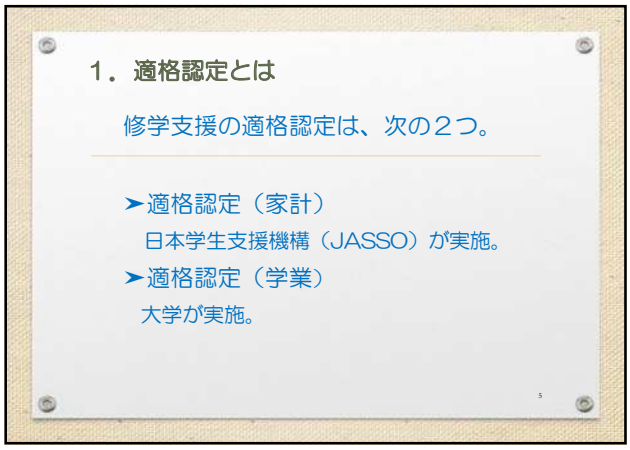
スライド3



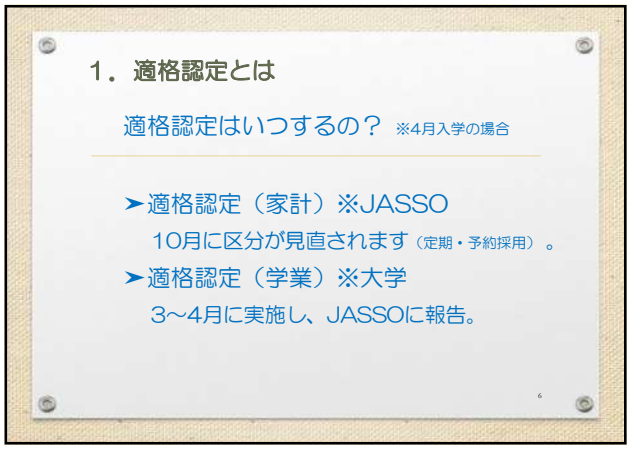
スライド4



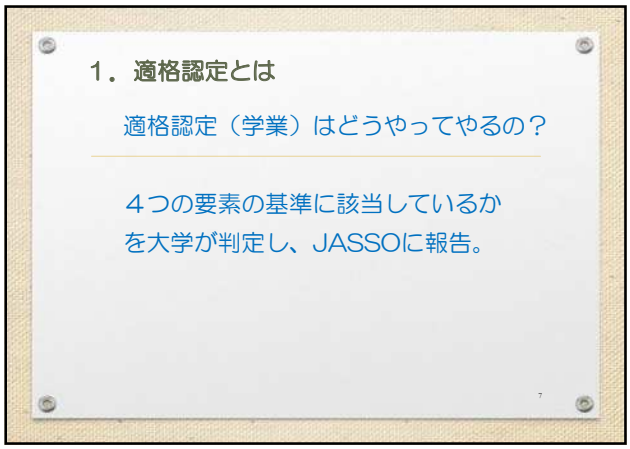
スライド5



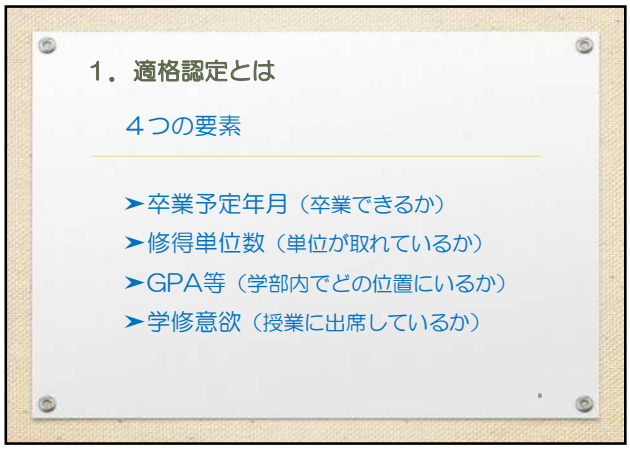
スライド6



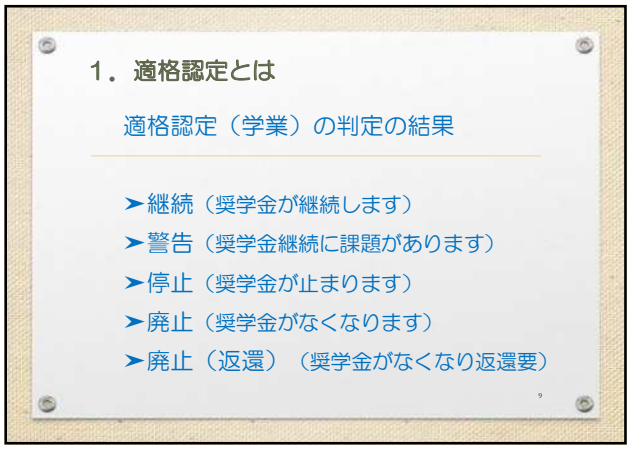
スライド7



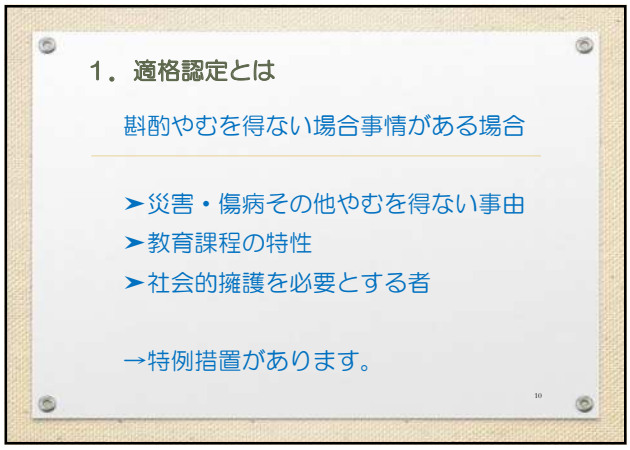
スライド8



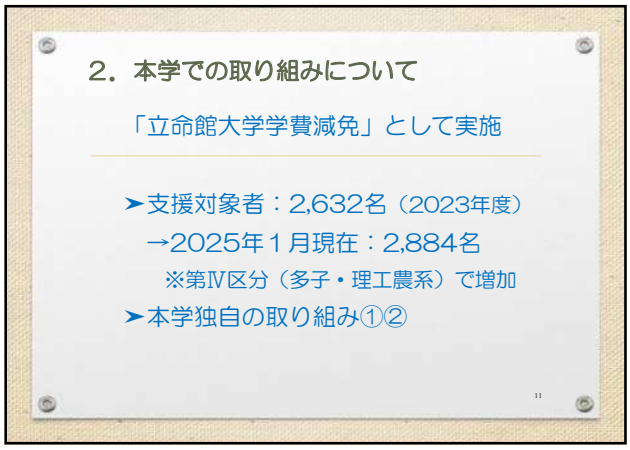
スライド9



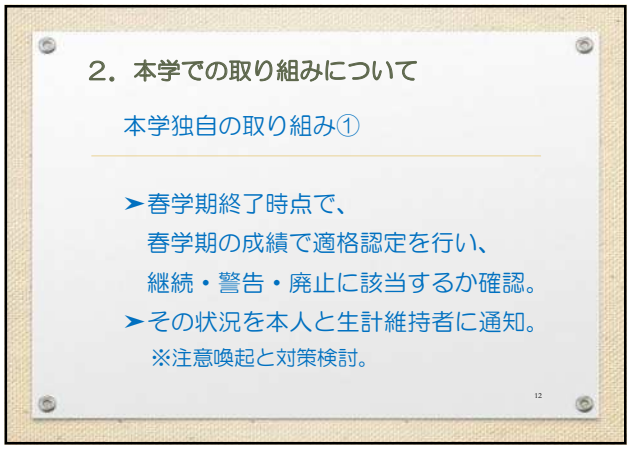
スライド10



スライド11



スライド12



スライド13

2．本学での取り組みについて

本学独自の取り組み①

➤その状況を本人と生計維持者に通知。
→学生さん→学内ポータルで通知。
→生計維持者→郵送で状況を通知。

➤警告・廃止相当の方に状況の改善を…

13

スライド14

2．本学での取り組みについて

本学独自の取り組み①

➤警告・廃止相当の方に状況の改善を…
1）秋学期での成績巻き返しができれば…
2）奨学金窓口での相談だけでなく、
個別サポート部署などを案内することで、
学修環境の改善（学び方を学ぶ）や、
個別の課題の解決につながれば…

14

スライド15

2．本学での取り組みについて

本学独自の取り組み②

➤適格認定（学業）などの結果、
支援対象外となった者のうち、
生計維持者の年間収入400万円以下
層を独自区分で支援。

15

スライド16

3．奨学金受給状況の学内共有について

奨学金情報は個人情報のかたまり

「個人情報の保護に関する法律」
に基づき個人情報の扱いを定めています。
本学でも以下を定め対応しています。
・学校法人立命館 プライバシーポリシー
・学校法人立命館 個人情報保護規程

16

スライド17

3．奨学金受給状況の学内共有について

奨学金情報は個人情報のかたまり

個人情報の取り扱いに記載されている
奨学金情報（事務システム等に搭載
されている情報など）について、
大学としてどう取り扱っていますか。

17

スライド18

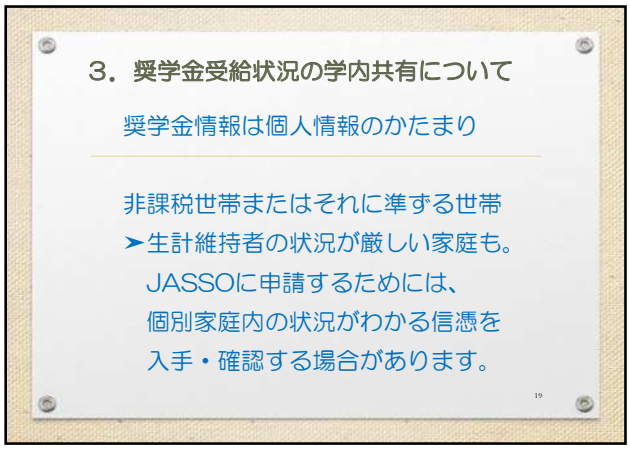
3．奨学金受給状況の学内共有について

奨学金情報は個人情報のかたまり

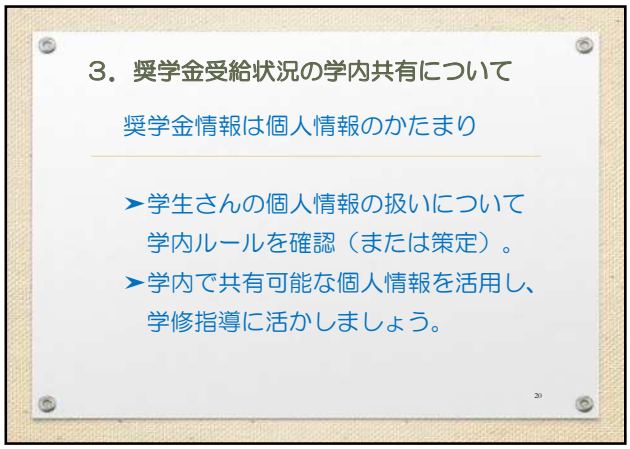
一方、高等教育修学支援制度にて支援を
受けている層（第Ⅰ～第Ⅲ区分）は、
非課税世帯やそれに準ずる世帯
の審査情報などをどう扱いますか。

18

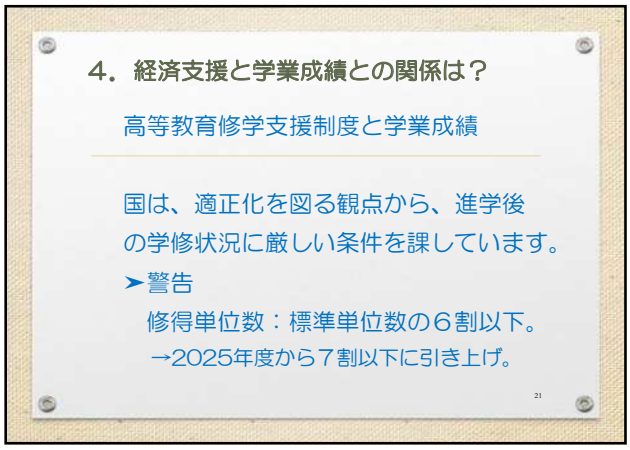
スライド19



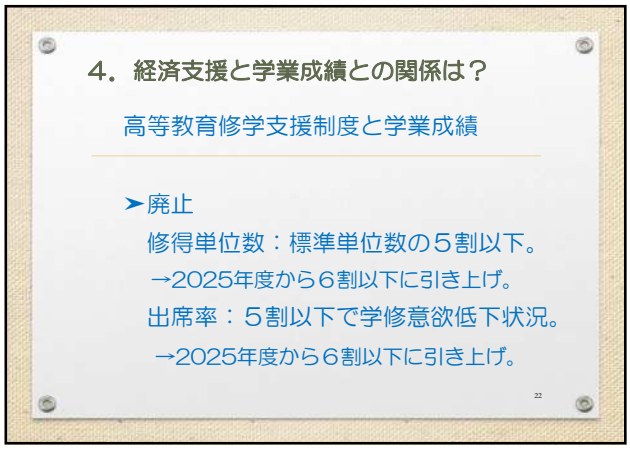
スライド20



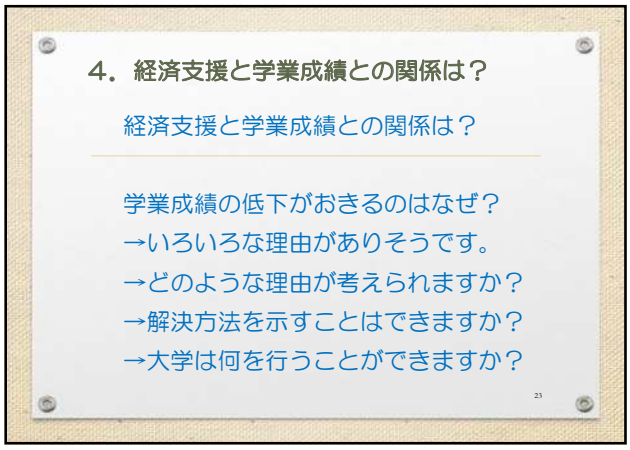
スライド21



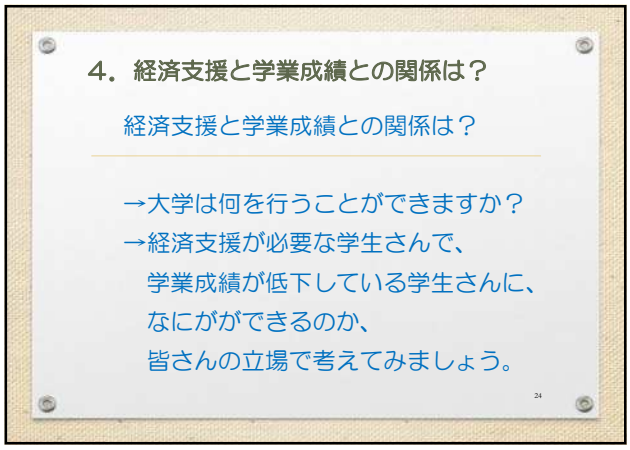
スライド22



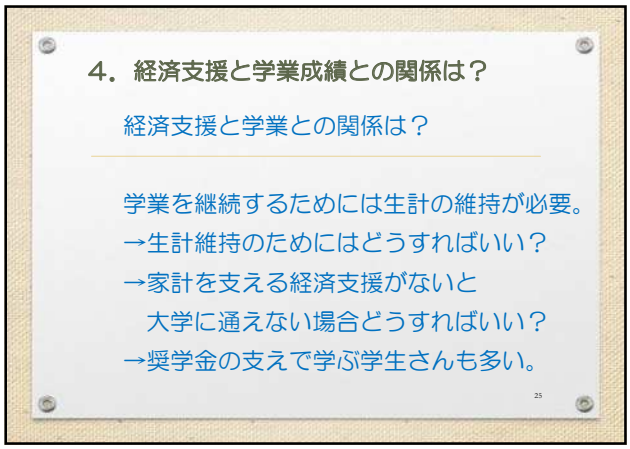
スライド23



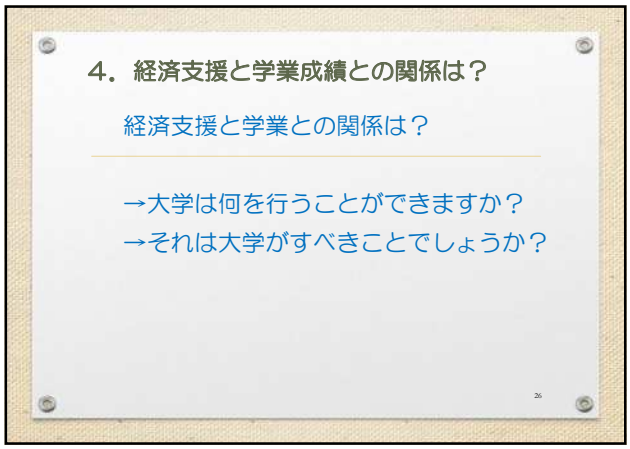
スライド24



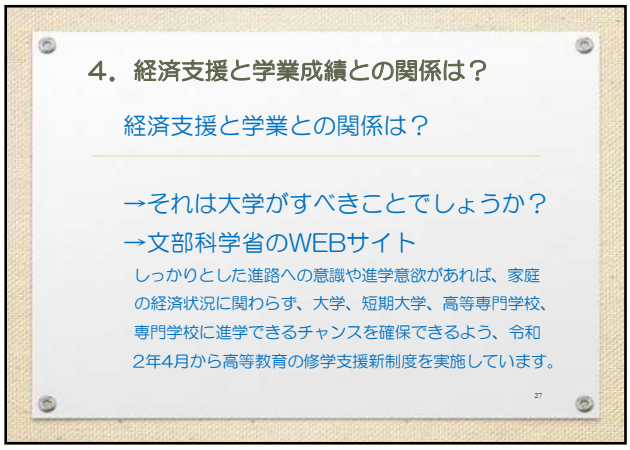
スライド25



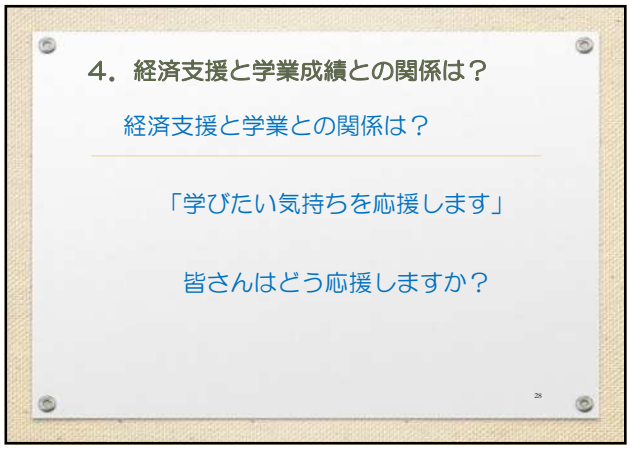
スライド26



スライド27



スライド28



山本 愛理　京都文教大学卒業生

スライド1

第30回FD・SDフォーラム
ワークショップ2
「今さら 聞けない奨 学金、今こそ 話したい学生支援」

当事者からみた奨学金

2025年3月2日
京都文教大学卒業生　山本 愛理

1

スライド2

申請時

高校生の頃に申請(予約採用)→大学入学時に登録(進学届)
日本学生支援機構奨学金(JASSO)の第二種貸与が始まる。

2

スライド3

申請時

申請内容は保護者の所得に関するものが多く、
「自分で借りる！」という自覚は薄い…

保証制度で人的保証を選んだときの叔父との会話

3

スライド4

受給中

学費を奨学金＋アルバイト代から出している自覚あり。
→学生FD活動に関わるきっかけに
教職員の方々と関わる機会が多い学生生活を送る。

4

スライド5

受給中

それほど良い成績ではなかったものの、
適格認定の警告を受けるなどの呼び出し経験はなし。

受給中の他の記憶は思い出せず…

5

スライド6

返還時

卒業前、返還の説明動画を見る。
返還(返済ではないらしい！)のおおまかなシステムや流れ、
滞ると「ブラックリストにのる！！」ということだけ理解。

口座などの面倒な手続きをしながらも、
「自分ごとに考えられていなかった」のが正直なところ

6

スライド7

返還時

返還合計額や月々の返済額も見ても、「こういうものか」
と思っていた。

7

スライド8

返還時

しょっぱなからフリーター＆入院手術で無職時期あり。

いつのまにか始まった返還が滞りそうな時期は、
親に代わりに払ってもらっていたことも。
（手続きが面倒だったので…）

8

スライド9

返還時＋α

卒業後した手続きといえば、苗字変更のみ。
（口座引き落としなので、何もしなくても返されていく）

大学職員になり、奨学金担当になる。
分厚い冊子を読んでやっと理解（自覚）した。

9

スライド10

返還時＋α

私自身が自覚の薄い学生だったため、奨学金を利用する学生となるべく対面で説明し自覚を促すように指導。

小規模大学だからできたこと。
何百人、何千人も担当している人はすごい！！

10

スライド11

返還時＋α

具体的には、
・採用に関する手続きで「親じゃなくて自分のことだよ」と丁寧に説明し相談しやすい環境を心がけた。
卒業前の手続き中に一括返還のメリットについて説明を行った。

など

11

スライド12

ご清聴、ありがとうございました。

12